九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語の起源の探求における現在位置 : アルタイ諸言語（含朝鮮語）との関係

板橋, 義三
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/7151993

出版情報：言語科学. 36, pp.99-112, 2001-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

「日本語の起源の探求における現在位置—アルタイ諸言語（含朝鮮語）との関係—」

板橋義三

0．はじめに

日本言語学会の第68回大会が1973年10月20,21日上智大学で開かれ、「日本語の起源」をテーマにした日本初のシンポジウムがあった。大野晋先生、崎山理先生、江上波夫先生、泉井久之助先生、村山七郎先生が基調報告者として参加され、系統論に関する研究方法、オーストロネシア語族の言語構造などが日本語との関連で発表されたと聞いている。つまり、今から27年前には日本語の起源に関する体系的な比較言語学的研究が本格的に日本国内ではすでに始まり（国外においても同様）、その成果が徐々に著されてきた時期であった。そして、それから約30年近くが経過し、日本語の起源、特にアルタイ諸言語との比較研究に対してはわずかながら着実に進展があった。即ち、日本語のアルタイ的要素として類型論的比較はなくなり、比較言語学の原理に基づいて音韻や語彙ばかりでなく、形態・統語のレベルでの比較が行われるようになったことなどがある。そのような中で日本語を起源として（分岐型）ではなく形成としてひとつの語族に帰属させない（収束型）混合説が国内では初めて現れたことでさらに日本語の起源に異なった視点が取り入れられ、方法論の複雑さが露呈するとともに、起源論・形成論という第二段階に入ってきたと考えられる。

日本語系統論における私の基本的な立場をまず述べる。日本語系統を論じる場合，上述のように基本的に２つの異なる立場がある。一つには一つの語族に帰属させる起源論（分岐型）ともう一つは二つまたは二つ以上の語族に帰属させる形成論（収束型）である。現在私自身としては後者の立場を取り，特に二つの異なる起源を持つとする混成語論である。さらにアルタイ諸言語間の親縁関係に関しては様々な問題はあるものの，アルタイ諸語間の親縁関係はあるだろうと見ている。

言語の起源の解決策として挙げた下記の比較言語学における三原則は必須(dogmatic)であるが，日本語のような言語の場合，方法論として特にそれのみに留まらず，単語家族や超分節音素における規則的な対応関係は勿論のこと，言語接触と言語孤立における言語変化類型と言語変化速度の関係，意味変化類型，共時態・通時態の音韻変化規則，借用(特に基

本稿は2000年11月26日(日)に行われた瀬戸市での日本言語学会秋季大会(121回)の基調講演「日本語の起源」の草稿に加筆修正したものである。

礎語彙における)の不可能性、さらには第二言語習得理論やバイリンガリズム、そしてピジン・クレオールの形成過程など(exploratory)が分かってくれば，より確実な親縁関係を築くことができると考える。さらにこの研究を始める為の最重要なことは国内外の研究者が一つに結集し，積極的に「日本語の起源・形成」研究プロジェクトを立ち上げ，参画，継続していくことである。

1．同系を示すための比較言語学上の三原則

同系を示すためには次の比較言語学上の三原則が同時に満たされることが必要である。この原則は印欧比較言語学の知見から形成された経験的原則であるが，特に日本語のように遠隔関係（distant relationship）と考えられる言語との同系性を問題にする場合，その原則それ自体を最低どの程度まで満たせば，同系と言えるのかという点に関しては統一された決定的見解はまだない。従って遠隔語族/言語間の親縁性をより確実にする方法は音韻，形態，文法，語彙・意味のレベルで量、質ともに三原則を満たすことである。

a. 基礎語彙の形態と意味が一致または類似・相似であること

b. 規則的な音韻対応を示すこと

c. 文法項目と形態素に一致が見られること

上記の三原則をそれぞれ順に見ていくことにする。

a. 基礎語彙の形態と意味が一致または類似・相似であること

基礎語彙は（100 項目）印欧諸語間でもすべて一致することはなくだいぶ借用などが見られ，遠隔語族間では一致しない語彙が多くある。しかしながら，基礎語彙はある程度借用可能ではあるが，混成語を含めた世界のどの言語でも多量（例えば，50%の基礎語彙借用）に借用されることはない。この点は経験的な大原則である。

基礎語彙を以下のように意味・形態を基に分類した。日本祖語(PJ)，朝鮮祖語(PK)，ツングース祖語(ＰMT)，モンゴル祖語(PM)，チュルク祖語(PT)，アルタイ祖語(PA)をそれぞれ示すが，特に一項目において少なくとも３語族・言語間で同源と見られる語のみを挙げることにする。 また［ ］内の語はアルタイ諸言語に同源語が存在しないと見られる語と二言語間のみで同源と見られる語彙を示す。

なお，ここで提示した祖語形の復元手続きに関しては紙面の関係上示すことができない

が、祖語形は Benzing(1955), Poppe(1960), Street(1974), Street & Miller(1975), Tsintsius(1975-7), Miller(1981), 金東昭(1981), Whitman(1985), Starostin(1991), Martin(1990,1994), Vovin(1997), 宋敏（1999）を参考にして復元した。

まずその前に日本祖語における母音について見ると、日本祖語の母音は 4 母音/iaou/と考える．従来古代日本語の母音に関しては 8 母音（大野説），6 母音（服部説），5 母音（松本説）の３つの説があるが，日本祖語では３母音説/iau/をとる学者もいたが、現在では４母音説にまとまっているようである．４母音説はここでは深入りしないが，その蓋然性が一番高いと考えるが，３母音説ではアルタイ所諸言語または祖語、またオーストロネシア諸言語または祖語との共通の語彙や形態素をもつと言うことを体系的に説明するすべを全く失ってしまいかねないし、アルタイ諸言語または祖語(Street1974:3)（9 母音：4 対/iüïu;eöao/の調和する母音と中立母音/ė/）やオーストロネシア祖語(4 母音/iaou/)との母音の数が異なり比較そのものが成り立たないだけでなく，日本語は全く孤立言語であるということにしかならず，非生産的でもある．

１．代名詞（全部で８項目の語がある；以下数のみを記す）

意味	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
我々	*ba「我/我々」	--	*bua	*ba/ *bi-ta	*biz	*ba
汝	*na	*na 「我」	--	*na-「我」	--	--

[誰，我，これ，それ，あれ，何]

古代日本語には一人称代名詞には a, na, wa の他に nare, ware などがあり，na は主に二人称に使われたが，一人称にもまれに使われた．このほかに二人称には i と si が使われたが，si は主に３人称代名詞と指示代名詞として使われ，あたかも i と si がちょうど人称上では対になっているようであり，互いに何らかの関係があったと見られている．それに対し，na と wa も一人称代名詞の中でも使用領域が特定されていた感があり，ここで示しているように，wa は対になっているもの（夫婦）や抽象的なもの指すことが多い(notional plural)のに対し，na は単数のものを指している．これはアルタイ諸言語の ba と na にちょうど対応して同源語である蓋然性が高いが、朝鮮語からの借用の可能性もある。

２．数に関するもの（4 項目）

[多い PJ*mane- PK *man-h-，一，二，みな] 同源と考えられる語なし

この数に関する基礎語彙は４つだけであるが，そのうちのどれもアルタイ諸言語と同源である可能性がなく、上記の「多い」だけが朝鮮語と関係がある可能性がある．数字に関

する基礎語彙は借用される例もだいぶあり，現段階では基礎語彙の中でも中心的なものではない。が，もし１から１０の数字の中で少なくても半分が同源であると確認されれば，それはその言語が同起源であることを暗示している．（ただし、現代日本語のように２つのこのなる数のセット（中国数と和数）がある場合は別である)。事実アルタイ諸言語とは数字３，４，６，７，８，９，１００などが同起源であると考えられる．

３．形容詞（10項目）

[大きい，小さい，長い，寒い，良い/善い，丸い，乾いた，新しい: PJ*sara(更); PK *sai , 満ちた:PJ *mit-; PK *müt-「及ぶ」(>MK mit-), 暑い/暖かい: PJ*atu-/*ata-taka-; PK *CVtakap/*CVtatut] 同源と考えられる語なし

形容詞という品詞の範疇でもアルタイ諸言語と同源と考えられる語はないようであるが、朝鮮語と比較できる、または同源と考えられる語が多少ある。特に重要と見られるのは「新しい」という語の対応である。これは後に述べるウイットマンの法則の例としてあげられるものである、これまで指摘されてこなかった例である。

４．人間（3項目）

[女，男，人]同源と考えられる語なし

基礎語彙の中でもこれらの中心的な語であるにもかかわらず、同源と考えられる語がみつからないのは非常に奇異に思われるが、これはその原因と見られる可能性の一つにアルタイ祖語が日本語にいつどのように関係したかということにあると思われる；即ち日本語の混成性において、アルタイ祖語が多量文法借用という形で関係したと考えられることである。

５．身体に関するもの（21項目）

意味	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
皮膚/樹皮	*kapa	*kap-(>MK kač')	--	*ka γ u-da-sun「樹皮」	*kapuk「樹皮」	*kap-
臭ぐ(鼻)	*kag-	*koh「鼻」	*xo ŋ o-「鼻」	*ka ŋ -bar「鼻」	* ka ŋ V「鼻」	*ka ŋ -「鼻」
足	*pagi	*pal	*palga-n「足，脚」	*pala-gan「掌」	--	*pal$_2$「足，脚」
毛	*ka-Ci	*kilka	*xinga	*kilka-sun	*kïl	*kïl$_4$
心	*kokoro	*kokoyV(>MK kokoyyang)「核」	*xuku-n	*kökün「胸」	*gökü̈z「胸」	*kökör$_2$

[血，骨，頭，目，口，歯，舌，膝，手，首，耳，胸，肝，肉，腹: PJ*para PK*pai(>MK poy), 摘む/爪/つまむ: PJ*tum-/*tuma-; PK*čup-「摘む」 PK*top-(>MK t'op)「爪」]

身体語彙に関してはほとんどがアルタイ諸言語と共通のものが見出されないが，これは

必ずしもアルタイ諸言語との親縁性がないということを暗示しているわけではなく，上述したように多量の基礎語彙借用はこれまでどの言語でも発見されていないので，これらの基礎語彙が借用以外の形で日本語の層として存在していることを示している．

6．動作に関するもの（19 項目）

意味	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
食べる	*ǰip-(>yip>ipi)	--	*ǰəp-	*ǰə-	*ǰə-	*ǰep-
かむ	*kam-	--	--	*kebi-「かむ」	*kab-「かむ」	*keb-「かむ」
聞く	*kik- *kui(>MK küi)「耳」	--	*kul-ku「中耳」	*kul-kak「聞く」	k'ul$_1$k-「耳」	
知る	*sir-	*sey-「数える」	*sal-	*sana-	*san-「数える」	*sa-
泳ぐ	*oyo-k- *hoyo-(>MK həyə-)		*eye-	--	--	--
横になる	*nu-（寝）	*nup-「臥」	--	*nobīr「寝ること」	--	--
腰掛ける	*bi-/*bi-si-「ある」	*bi-「ある」	*bü-「ある」	--	*bü-	
焼く 1	*yak-/*dak-	*da-(>MK tə-)	*dür-	*dör-	--	*dör$_1$

死ぬ: *tuk-(尽きる) PK *tuk-(>MK ti->NK ču̇k-)「死ぬ」 PMT *tuku-「死ぬ」 -- -- --

[飲む，見る，眠る，殺す，飛ぶ，立つ，与える，歩く，来る: PJ*ko- PK*gel-，言う: PJ*yip- PK *ip「口」，焼く 2 : PJ *kub- PK *kup-,]

動詞は他の範疇と比べて非常に共通すると考えられるものが多いのが特徴である．これは形容詞と比較するとその対照が浮き彫りにされる．これは基層または混成語の語彙を基盤とする言語がアルタイ系言語ではないことを暗示しているように思われる．

7．自然界に関するもの（14 項目）

意味	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
水	*mi-	*mul	*mu-	*mor	--	*mor$_1$
石	*yiso	*dulg(>MK tolh)	*jolo	*tilagun	*taš	*dol$_2$V
地	*na「土」	*na-(>MK nara「国」)	*na「土」	--	--	--
山	*dama	--	*daba	*daba-「登る，越える」	--	*daba-「登る，越える」

[太陽，月，川，火，砂，煙，灰，星: PJ *posi PK *piol (>MK pyel)，雲: PJ *kumuCa PK *kumum，夜: PJ *do PMT *dolba]

このカテゴリーでも上記の形容詞のカテゴリーと同様に極端に共通と考えられる語が少ない．この中でも「水」を表す古代日本語には 2 つ全く系統の異なる形態素 mizu/mi-と na-（複合語「なづきだ/na-duki-ta/」‘水に浸かった田’の形で存在）が存在しており，一般

には後者はあまり知られていない．後者はアルタイ諸言語と共通するものはなく，他の語族との比較（オーストロネシア語族）が考えられる．

８．生物及びその関係するもの（9項目）

意味　PJ　PK　PMT　PM　PT　PA

鳥　*tori　*tolk「鶏」*turaakii「烏」*tura-γu-n「渡り烏」*toriga「小鳥，ひばり」*torV-

[魚，羽，虱，脂肪，卵，角，尾，犬: PJ *inu PMT *ŋinda]

この意味範疇では動物などの身体部分や関連語彙にはあまり共通した語が見出されない。が，「犬」にあたる日本語がツングース諸言語と軌を一にしているが，これも上記の「水」と同様，系統の異なると考えられる語が２つ存在していたと考えられる（村山1996）．それは*inu と*woso であり，後者は「かわうそ」の「—うそ」という複合語の一部として残っている．

９．植物（5項目）

意味　PJ　PK　PMT　PM　PT　PA

樹皮　*kapa *kap-(>MK kač')　--　*kaγu-da-sun「樹皮」*kapuk「樹皮」*kap-

[木，葉，根，種]

植物の部分を表す基礎語彙はほとんどアルタイ諸言語にその起源を求めるのは難しく古代日本語には多くの一音節語がこの範疇にはいる．この特殊な状況は日本語の形成史にとってどのような意味を表しているのか深く追求する必要がある．

１０．色彩（5項目）

[緑，黄，白，黒，赤]　同源と考えられる語なし

色彩に関しては全く共通語彙を見出すことは出来ないようであるが，これもアルタイ諸言語との親縁性がないことを裏付けるものではないが、この意味するところは日本語が分岐型の言語ではないということであるように見える。

１１．その他（3項目）

[名前，道，でない(否定辞)]　同源と考えられる語なし

この項目に関しては語彙としても借用可能であり同源と考えられる語がないので、これらの語は他の語に取って代わられたか、またはその語自体がアルタイ諸言語とは無関係の語族から継承しているものかもしれない。

まず上記の表から気づくことは日本語との同源語が少ない（約 20%）ように思われるこ

とである。しかし，これは遠隔比較であるということを念頭に置いた場合，印欧語の場合と比べてあまり遜色はないばかりでなく、どのようにしてこのように多くの語が起源的に共通しているかを単に借用として説明することは不可能であると思う。

上記のリストで気をつけたいのは日本語と朝鮮語だけに同源と思われる対語があり，そのペアには朝鮮語では名詞になっているのに対し日本語では動詞になっているものがいくつかあることである。

例えば，日本語の「嗅ぐ」に対応するものはどれも朝鮮語（この場合はアルタイ諸言語も共通）の「嗅ぐ」という動詞ではなく，その器官である「鼻」という名詞である．このほかに次のような日朝共通語彙が見られる．

J	K	J	K
Sak-「咲く」	sak 「芽」	um-/umar-「産む/生まれる」	um「芽」
Moy-「萌える/生える」	mo「苗」	or- 「織る」	or 「絲」
Ar-「ある/生まれる」	arh「卵」	yip- 「言う」	ip 「口」
Kik-「聞く」	kwi「耳」		

また日本語と朝鮮語の類似性（宋 99：134—43：1，2 のみ）について見てみると

（1）一時的散発的な言語上の接触ではなく同起源と考えた方が説明の付く面

（2）文化的影響（借用）によると考えた方が説明の付く面

の二面性があると考えられるが，（1）に関してはアルタイ的な特徴と見られる面と非アルタイ的特徴がある．これを語彙的に見ると，前者は動詞，形容詞の語根や接辞，基礎語彙の中に見出されるのに対して，後者は基礎語彙ではなく，文化語彙の中に見出される．

（1）に関しては：

(a) アルタイ的要素：動詞，名詞，形容詞の語根や接辞などの形態の一致

(b) 非アルタイ的要素：日本語と朝鮮語のみに共通し、アルタイ諸言語には見られない要素：音韻、形態、類型論的共通点（大野 1957；宋 1999：90－1）

1．語頭に有声音が来ない　（OTK の同様）

2．l と r の区別がない　（areal feature と考えられる）

3．人称語尾を持たない　（満州語も同様）

4．敬語接尾辞-si を持つ

5．高低アクセントを持つ

6．母音調和がない　（Vovin 1995；Martin 1999）

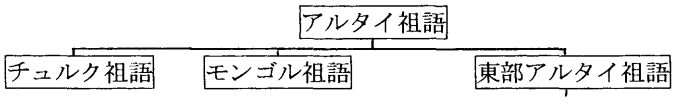
括弧で示しているようにアルタイ諸言語に全く見られないという特徴でもないものもあるが、概してアルタイ諸言語の特徴から距離を置くものがあることが重要な観点である。さらにそれを補強するかのように、(4), (5)の特徴は全くアルタイ諸言語には見られない特に重要な特徴が見られることである。

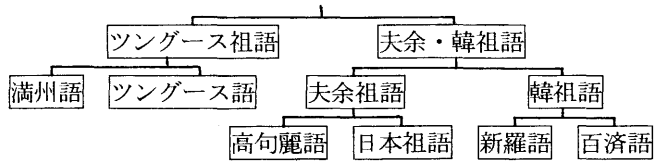
(6)に関しては、昨年 1999 年のハワイで行われた国際韓国語学会で S.Martin が朝鮮祖語には母音調和は存在しなかったという衝撃的な発表を行い，その証拠となる材料を数多く提示し、翌年の Korean Linguistics (2000 Vol.10)に掲載された．これが真実の姿であるとすると，朝鮮祖語はアルタイ系言語から従来理解されていたよりもかなり離れた位置にあると見た方が妥当であろう。

（2）に関しては農作関連語、法関連語、社会構成関連語など社会文化関連語彙が借用されたと考えてほぼ間違えないであろう。

このような特徴から朝鮮語は起源的にはアルタイ諸言語とは距離があるのに対して、日本語とはさほど疎遠な関係ではないことを暗示している。またこれは日本語と朝鮮語がともにアルタイ諸言語と距離をおく言語であることも暗示している。ここでは示していないが、高句麗語が日本語と朝鮮語とをアルタイ諸言語につなげ、その間のギャプを埋めるという役目を果たし、日本語の系統説をアルタイ諸言語との親縁性を高めるのに有力な根拠になったと（宋敏 Song Min 1999：89）としている。しかしながら、これは日本語と朝鮮語がともにアルタイ諸言語との親縁性のみを裏付け、南方諸言語との関係に関しては不問であり、その親縁関係がないという証拠にはならないし、事実親縁関係を示すような語例が見出されている。

高句麗語に関しては現存する８０あまりの語彙のうち４つの数字（3，5，7，10）を含む３０あまりの語が日本語に共通していると考えられ、（河野（1994）は高句麗語ではなくツングース語族の歳語であると主張した。）これが日本語と高句麗語との親縁性の根拠になっている。即ち、日本祖語が韓祖語（＝朝鮮祖語）と異なった位相において高句麗語と近い言語であったため、アルタイ諸言語（特にここではツングース語族)、朝鮮語と異なった特徴をもつに至ったと考えられる。この系統関係を図式化すれば以下のようになる。





また上記のアルタイ諸語間の共通語彙は基礎語彙であることにも注意されたい。これらの語の共通性はアルタイ諸語間（三語族間）の親縁性を最も強力に裏打ちしていると考える。これは多量の基礎語彙の借用は不可能であるから，日本語，朝鮮語も含めてアルタイ諸語と共通する語が存在する場合これらの言語の同源性が高いことを示している。

b. 規則的な音韻対応を示すこと

上記 a の復元形を基に音韻対応関係を整理すると次のようになる。

PA	PJ	PK	PMT	PM	PT
*p	*p	*p	*p	*p	*p
*b	*b	*b	*b	*b	*b
*t	*t/*d	*t	*t	*t	*t
*d	*y/*d	*d	*d	*d	(*y)
*k	*k	*k	*x/*k	*k	*k
(*g	*g	*g	*g	*g	*g)
(*ɣ	*t	*ɣ	*ɣ	*ɣ	*ɣ)
*ǰ	*ǰ	(*ǰ)	*ǰ	*ǰ	*ǰ
*s	*s	*s	*s	*s	*s
*m	*m	*m	*m	*m	*m
*n	*n	*n	*n	*n	*n
*n	*g	*g	*n	*n	*n
*-r_1-	*r	*r	*r	*r	*r
(*-r_2-	*Z/*r	*r/*-y-	*r	*r	*z)
*l_1	*r	*l	*l	*l	*l
*-l_2-	*-s-	*-l-	*-l-	*-l-	*-s-

(　)内は他の比較語彙によって埋めた。

音韻対応の詳細を記述するのは紙面の関係上不可能であるが，アルタイ諸語間の音韻対応に関する先行研究をも参考にして復元した。しかしながら，先行研究の中には日本語または朝鮮語の復元形を反映させてアルタイ祖語を復元しているものがある(e.g. Starostin, Vovin)が，ここでは日本語と朝鮮語は厳密には最初からアルタイ諸語の中に含めることはできないので，この二言語を除いて三語族間で復元できるものをアルタイ祖語とした。

上記の表から分かるように，ほぼ規則的な音韻対応があることが理解される。この中で従来問題にされてきたように，アルタイ祖語の音素/r_1, r_2, l_1, l_2/ に対応する日本語の音素はチュルク語族の対応音素と非常に類似しているということが言える。特にアルタイ祖語の音素/r_2, l_2/ に対応する日本語の音素の一つに/z. s/があり，この対応が認められると，日本語をアルタイ諸言語の一派と考えてもよいかもしれない。それはこの対応がほとんど借用の余地のない基礎語彙に見出せるからである。また母音の大まかな対応が見られるが，多くの場合まだその対応母音には問題が多くその解明が急がれる。

c. 文法項目と形態素に一致が見られること

(1) 格助詞

多くの日本語の格助詞がアルタイ諸語の接尾辞に対応することは先行研究によって知られている事実である。少なくとも他の語族と比較したものはウラル語族とタミール語のみであるが，それはあまり成功したとはいいがたい。以下にアルタイ諸語との対応表を挙げる。

	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
主格	*-i	*-i	--	--	--	--
所有格1	*-n-ka(>OJ-ga-)	--	*-n-ki(>ŋi)	--	*-n-kV(>OT-ŋ)	*-n-kV
所有格2	*-n	--	*-n	--	--	--
対格	*-bo(強調も)	*-bi(>OK* -γil)	*-ba(強調)	*-ba	*-ma(強調)	--
向格1	*-ti(>OJ -ʑi)	--	*-ti(>*-ʑi)	--	--	--
向格2	*-ra	*-ru(>OK -ro)	*-ri	*-ru	*-ra/*-ru	*-ṛu
沿格	*-ri「向格」	*-ri「向格」	*-li	*-li	--	*-l̩i
造格	*-ʑi	--	*-ɣi	--	--	--
所有/処格	*-tu/*-du(>OJ -yu)	--	*-du「与/処格」	*-du「処格」	*-du「処格」	*-du「処格」

日本祖語との比較で共通している格助詞の項目が最も多いのはツングース祖語であるが、この点は形態・統語のレベルにおいて日本語とツングース諸語との親縁性が深いと考えられるのに対して、地理的に近い朝鮮語との親縁性がやや浅く、日本語に対してツングース諸語と朝鮮語のそれぞれの同系関係が幾分異なっていることが窺われる。これは上記の基礎語彙の項で述べた何対かの日本語動詞と朝鮮語名詞の例と類似しているが、同源と考えられる語彙項目がツングース祖語と朝鮮祖語とで違っていることも特徴的である。

(2) 動詞及び形容詞に付く接尾辞

	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
否定辞１	*-ani-/*-az-(<*-ani-su)	*-ani	--	--	--	--
否定辞２	*-ma-(>OJ ma-i)	*-ma-(MK -mal-)	--	--	*-ma	--
述部導入接辞	*-bi(>*-wi>OJ -i)	--	*-bi	--	--	--
尊敬接辞	*-si	*-si/*-sy	--	--	--	--
仮定接辞	*-masi	--	*-maČV	--	--	--
接続接辞	*-ku(形容詞＋)	*-ko	--	--	--	--

否定辞は借用可能であるという事実があるが、日本祖語と韓祖語の親縁性の近さから借用された可能性は非常に低いのではないかと考える。それは日本祖語には 2 種類の否定辞が見られるが、否定辞１では意味が幾分変容し機能が異なってきている。また否定辞２ではMK –mal-はウイットマンの法則に従って日本語では ma という予想される形態となっているからである。

述部導入接辞は本来連用形-i<-*wi<*-bi であり,終止形もかねていたと考えられ、連体形の-u が後に終止形に拡大し、本来の終止用法-i は縮小し連用用法のみを担うようになったと考えられる。この裏づけとして ari,wori などのラ変動詞の終止形 -i で終止しており、これは本来の名残と考えられるためである。」

「これらの接尾辞はほとんどが朝鮮語かツングース諸語との共通語彙であるが、このことはとりもなおさず、朝鮮語とツングース諸語がほかのアルタイ諸語と比較して日本語に非常に近い親縁関係にあることを示唆している。また尊敬接辞が日本語と朝鮮語のみに共通しているという事実は借用はほとんど意味・機能から考えて不可能であろうから、この 2

言語が同系である蓋然性が高いことを示唆していると同時に、その分岐は多分相当時代が下がってからである可能性が高いと思われる。従って、ツングース祖語からの分岐は朝鮮（韓）祖語よりも古いと考えられる。」

(3) 動名詞化接尾辞

	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
非完了	*-ra「未然」/*-ri「連用」	*-r	*-ra/*-ri	*-r	*-r	*-r
非完了	*-si「状態 V;形容詞語尾」	--	*-si	--	--	--
非完了	*-m(>OJ -mu)「推量」	*-m	*-m	*-m	*-m	*-m
完了	*-n(>OJ -nu)	*-n	*-n	*-n	*-n	*-n
完了	*-ki	*-ke/*-ka(>MK -ke/-ka/-Ge/-Ga)	*-kV	*-γa(>WM-γan)	--	*-ke

「これらはすべて時制と相に関しての接辞であるが、その大部分が朝鮮語を含むすべてのアルタイ諸語と共通しているという特徴が見出せる。この点から考えても、日本語が疎遠な関係であっても、同系であるといえるのではないかと考える。」

(4) 名詞に付く接尾辞

	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
複数接辞	*-ta-ti	*-tə-l(>MK -tolh)	*-ta/*-ti(集合)/*-l(複数)	--	--	--

日本語とツングース諸語とだけが一致するものも多いが，これは下記の形態素の部分からも理解できると思うが，日本語と朝鮮語だけが非常に近い関係をもっていたのではなくツングース諸語とも非常に深い関係をもっていたことが理解される。

(5) ウイットマンの法則（PJ における*-r-, *-m- 消失規則）

これは1985年のジョン・ウイットマンの学位論文で示した日本語と韓国語の音韻変化規則であるが、この規則については大野（1957）「日本語の起源」でもその一部の音韻対応例が示されてはいたものの、体系的に示されていなかった。それをより緻密に体系的に示し

たのがこの法則である。

MK において-l-, -m-の前の音節が高く（上声：）長い場合にはそれに対応する OJ の語における語中の-l-, -m-は-r-, -m-として保持される。反対に MK において-l-, -m-の前の音節が低く（去声・）短い場合にはそれに対応する OJ の語における語中の-l-, -m-は消失し保持されない。

PKJ > PJ > OJ　　PKJ > PK > MK

*-r- > Φ（ゼロ）>Φ（ゼロ）/ CV̀ _ (V/C)　　*-r- > *-r- > -l- / CV́ _ (V/C)

*-m- >Φ（ゼロ）>Φ（ゼロ）/ CV̀ _ (V/C)　　*-m- > *-m- > -m- / CV́ _ (V/C)

MK .kolo「煮詰める」: OJ ko-「濃い」　　MK .mom 「身」: OJ mi 「身」

MK .mol「藻」: OJ mo 「藻」　　MK .kuma 「子」: OJ ko 「子供」

MK :kol 「谷」: OJ kura 「鞍」　　MK :om 「かさぶた，かゆみ」: OJ umi 「膿」

上記６例のうち上段２つは古代日本語において語中の-r-,-m-が消失した例であり、下段はそれが保持された例である。これらの例のほかに音節の縮小が生じたものがあり、以下にその例をあげる。

MK :oy(<*o-ri) 「瓜」: OJ uri「瓜」　　MK :kom(<*ko-ma)「熊」:OJ kuma「熊」

上記の MK「瓜」「熊」の例はそれぞれ MK の-r-と-m-の前の音節が高い（上声：）の場合で、二次的に発達したものである。それは本来語頭の音節が低い二音節語であったものが一音節化し（「平声」(第一音節)＋「去声」(第二音節)＞「上声」となった)、後の MK では-r-,-m-を失ってしまった例である。これに対し、OJ では本来の第二音節の-r-と-m-が保持されたものである。

この法則は日本語と朝鮮語の親縁関係をより確実なものにしたという点とこれまで不明であった同源語がさらに抽出できる可能性を見出した点で非常に重要である。

２．おわりに

基本的な比較言語学上の原則に則り朝鮮語とアルタイ諸言語とを日本語と比較し、その親縁性を述べた。上記のように日本語は朝鮮語とアルタイ諸言語と十分親縁関係があるという確実な証拠を徐々にではあるが，見出している。特にウイットマンの法則が発見されたことにより，日本語と朝鮮語との親縁関係は従来の同源語の語数を上回ってきており，さらに同源語が朝鮮語にのみならずアルタイ諸語にも見出されており，アルタイ諸語との親縁関係がより確実になる日が訪れるかもしれない。

主 要 参 考 文 献

1. Benzing, Johannes 1955 Die tungusischen Sprach versuch einer vergleichenden Grammatik, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag
2. Itabashi, Yoshizo 1987 'Altaic Evidence for the Japanese and Korean Case Suffix Systems' Unpublished Ph.D. Dissertation, University of Washington
3. 金東昭(Kim, Dongso) 1981「韓国語 Tungus 語 音韻比較研究」暁星女子大学校出版部
4. Martin, Samuel 1990 'Morphological clues to the relationships of Japanese and Korean' in Philip Baldi (ed.) Linguistic Change and Reconstruction Methodology, pp.483-509, Berlin and New York: Mouton de Gruyter
5. Martin, Samuel 1994 'Recent Research on the Relationships of Japanese and Korean', in S. Lamb & E. Mitchell (eds.) Sprung from Some Common Source, Stanford Univ. Press
6. Miller, Roy 1981「日本語とアルタイ諸語」 大修館書店
7. Miller, Roy & John Street 1975 Altaic Elements in Old Japanese: Part I(draft version), Madison: privately published
8. Murayama, Shichiro 1957 'Vergleichende Betrachtung der Kasus-Suffixe im Altjapanischen' in Studia Altaica, Festschrift fur Nicholaus Poppe zum 60. Geburstag am 8. pp.126-131, Wiesbaden: Otto Harrassowitz
9. Ramsey, Robert 1991 'Proto-Korean and the Origin of the Korean Accent', in W. Boltz and M. Shapiro (eds) Studies in the historical phonology of Asian languages, pp.213-238, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins
10. 宋敏(Song, Min) 1999「韓国語と日本語のあいだ」東京：草風社
11. Starostin, Sergei 1991 Altaiskaia problema I proisxozdenie iaponskogo iazyka, Moscow: Nauka
12. Street, John 1974 On the Lexicon of Proto-Altaic: A Partial Index to Reconstructions, Madison:privately published
13. Tsintsius, Vera ed. 1975-77 Sravnitel'nyi slovar' tunguso-ma'chzhurskikh iazikov. Vol. 1-2, Leningrad: Nauka
14. Vovin, Alexander 1997 'Notes on Some Japanese-Korean Phonetic Correspondences', Japanese/Korean Linguistics Vol.3 pp.338-350
15. Whitman, John 1985 The Phonological basis for the comparison of Japanese and Korean, Unpublished P.h.D. Dissertation, Harvard University